

ピエール＝ジャケス・エリアス研究の現状について (2)

梁 川 英 俊

7. Thierry Glon. *Pierre Jakes Hélias et la Bretagne perdue*. Presses Universitaires de Rennes, 1998, 113 p.

著者のティエリー・グロンはナント大学の教員で、1990年に「1960年から1980年までにフランス語で書かれたブルターニュ文学」というタイトルの博士論文を提出している。筆者はこの博士論文は未読だが、本書はおそらくその第一部「ピエール＝ジャケス・エリアス、あるいはいかにしてその後を生きるか」が元になっていると思われる。

グロンの研究の特徴はなによりもエリアスの作品をすべて「文学作品」という観点から扱っていることであろう。しかし、本書はけっして読み易い書物ではない。著者の論述はしばしば抽象的で重複が多く、もちろん要約も容易ではない。したがって、ここではあえて本書の構成にとらわれずに、「民族学者」「ブルトン語」「過去」という3つのテーマからその内容を整理してみることにしたい。それにより著者の意図は幾分か裏切られることになるかもしれないが、本書の独自性は十分に伝わると考える。

エリアスは民族学者なのか

エリアスと言えば、一般的にはいまだに民族学者、あるいは「伝統社会の証人」というイメージが強い。しかし彼は本当に民族学者なのだろうか。著者はまずこの点を問う。

エリアスを一躍有名にした『誇り高き馬』は、読者にビゲーデン地方の複雑さや異質性を知らしめた。しかし著者は、それが民族学的というよりは絵画的な方法でもたらされていることに注意を促す。エリアスは兩大戦間のビゲーデン地方の風俗習慣を、まず視覚に直接訴えるような見事な描写によって示す。農作業も、聖ヨハネの火のような祝祭も、パルドン祭や結婚式やクリスマスも、そこでは多くが絵画的に了解可能な情報として扱われ、その背後にある迷信等への踏み込んだ説明は省かれる。それらは解釈されるというよりは、提示されるのである。

そもそもエリアスの民族学的記述は、つねにある種の価値判断を帯びている、と著者は言う。つまりそれは「民族学」というよりは「証言」なのだ。エリアスが農民を描くのは、彼らを学問の対象とするためではなく、もっぱらその名誉を回復しようとするためなのである。

エリアスは農民をよく都会人と対比する。都会人は農民の独特の価値や行動様式や言語が理解できない人として描かれる。農民の異質性は彼らには無意味でしかない。エリアスはその異質さの背後にある規則の存在を暗示する。農民が異質なのは、彼らが独自のルールに従っているからなのだが、そのルールは都会人には見えないのである。しかし、エリアスはそのルールを解明してみせることはしない。逆に解明しないことによって、その社会の豊かさを暗示してみせるのである。著者

は「沈黙」によって語らせるその方法が、民族学者のものではなく、むしろ文学者のものであると指摘する。

エリアスはまた伝統社会の叡智を称揚する。その代表は祖父であろう。無学な人々を哲学者の叡智と威厳を持つ存在たらしめるのは、前の世代から受け継がれてきた知恵なのである。それは現代の個人主義とは無縁のものである。エリアスが好んで持ち出すのは、世代の鎖というイメージだ。農民は自らを過去・現在・未来の世代をつなぐ一つの鎖の環として考えている。それゆえ彼らにとっては死もまた悲劇ではない。『誇り高き馬』のなかで瀕死の人間が口にするのは、「私はこれから家に帰るのです」¹という言葉なのである。

エリアスにおいて、農民を貶める言葉はどこにも見当たらない。彼らを都会人と対比させるのは、都会人に顔を赤らめさせるためであって、その逆ではない。エリアスには最初から農民の名誉を回復しようという、きわめて主観的な意図がある。この姿勢は、彼を民族学者や社会学者の対極に置く。エリアス自身こう言っている。「私は民族学者ではなく、善意の語り部なのである」²。あるいは「私は皆が言うような一般的な意味での民族学者ではない。私はマージナルな人々を描こうとも、知られざる文明の目録を作ろうとも、奇妙な行動を外側から解明しようとも思わない。(……) 私は原住民だ。私が報告する現象は私の内側にある」³。

エリアスにとって、民族学者とは外から距離を置いて対象を理解しようとする人だった。しかし、にもかかわらず、若いときからモンテーニュやシュールレアリスムを読む知識人であったエリアスが、本当に彼の言う「原住民」であり得たのかは疑わしい。そもそも書くとは、対象の外に身を置くことなのだ。しかし、彼はついにそれを受け入れることができなかった。何冊かのガイドブックを除いて、彼はブルターニュについて客観的な情報だけを与える本は書いていない。エリアスは文学によってしか過去について語れなかったのであり、その著作はフィクションを自称する奇妙な民族誌学なのである。『誇り高き馬』もまた民族学のテキストというよりは、コラムであり子供の夢想なのだ。

こうしてエリアスは民族学以前の時代へと逆戻りし、必然的に20世紀初頭の地域主義文学が抱えていた問題を再発見することになる。しかし、この文学的な横滑りこそ、エリアスの仕事を独自のものたらしめている。彼にとって文学は消え去った共同体にアクセスするための戦略なのである。

エリアスはブルトン語作家なのか

エリアスはブルターニュの口承世界に生まれた作家として、自らの語り口においても口承性を重視した。いや、彼は作家であるのみならず語り手でもあった。その語り手としての経験は、戦後にラジオ＝キメルフ局のブルトン語放送を任されたときに否応もなく始まっていた。エリアスは田舎をノートや録音機を持って走り回ったが、優れた語り手は少なくなっていたので、自分で伝統を守ろうと決意したのだ。この「語り」という要素を抜きにして、エリアスの著作を語ることはできない。

1 Pierre-Jakez Hélias, *Le Cheval d'orgueil*, Plon, 1975, p.169.

2 Pierre-Jakez Hélias, *Les Autres et les miens*, Plon, 1977, p.137.

3 Pierre-Jakez Hélias, « trente années pour l'inventaire d'une langue et d'une culture », entretien avec Jean-Marie Le Sidaner, dans *Europe, Littérature de Bretagne*, mai 1981. 傍点はエリアス。

では、書き言葉の口承性とは何か。それはどのように現れるのか。たとえば『誇り高き馬』において、民族学的に重要な細部は、口承性を模倣するように話し言葉の形で与えられる。この作品の最後の言葉が「ごきげんよう」(Je vous salue bien.) というひと言であるのも、その一例だろう。口承性は脈絡のない逸話の連続というこの作品の構造そのものにも反映している。話題の移行はしばしば観念連合によって支えられる。父親から彼のシャツへ、彼の腕時計から貧しい両親へ、貧しい両親から語り部の両親へというように。そこでは話の転換も、しばしば会話におけるように、「それに」(d'ailleurs) というひと言で行われる。エリアスにおいては、ひとつの話題の終わりは別の話題の始まりであり、その連続が論理とは別の豊かな錯綜という印象を読者に与える。彼はまた、語り部のよく使う決まり文句を多用する。

エリアスの口承文化の起点にあるのはブルトン語である。知られるように彼は若い世代と違って、「ブルターニュ」という観念に価値を与えなかった。彼のブルターニュはビグーデン地方であり、それを超えるものは抽象であった。一方、そのブルトン語に対する姿勢は、自ら「ブルトン語話者である私にとって、ブルトン語は主人、私はその犬」⁴と語るように、完全に従属的であった。そこには言語は表現のための道具という素朴な言語観はない。実際、エリアスの使うフランス語のなかにブルトン語の痕跡を探すことは難しくない。

エリアスがブルトン語に無条件の執着を示すのは、それが彼にとって内面の言語だからである。ブルトン語とはいわば衝立であり、あるいは城壁なのだ。それは彼が他人の目にさらされることを防ぐのだ。しかもまたエリアスにとって、ブルトン語とは喚起力のある言葉であり、それ自体で詩なのである。彼が好んで真に民衆的な表現として提示するのは、「老人の言う甘い悪魔の罨」とか「赤いギャロップで逃げる」とかいう逞しい表現である。「記憶を乞う人」もブルトン語であり、「太陽の風」は「元気いっぱいの子」を指すブルトニスムだ。

学校に入るまでブルトン語しか話さなかったエリアスにとって、幼年時代の夢想はブルトン語で行われていた。そのせいで彼はフランス語をなかなか受け入れられないのだ。彼にとって涙は「心の水」であり「心の慰め」である。松ぼっくりは「松の御者」である。サクラソウは「ロック (Loc) の縁日の花束」である。地理の教師はマダガスカルがブルトン人の子供には「運転免許証」(mad da gas kar) を思わせることを知らなかった。

エリアスにとって、このブルトン語の世界を離れてフランス語を覚えるのは、充実と喪失がない交ぜになった経験だった。そして彼はその経験を屈辱とか進歩への接近という次元では捉えずに、ブルトン語話者が犯す特有の間違ひという形で表現しようとする。「ムクドリ (tridi) の群れが村の上を通っていた」とフランス語で書こうとして、「三軒の家 (tri di) が村の上を通っていた」という意味の文章を書いてしまう生徒の話のように。

エリアスはブルトン語の社会学的価値を考察し、この言葉が田舎の言語の完全さを持つと言う。それは農民たちの生活を十全に表現し得る唯一の言語なのである。「ブルトン語は日常生活に適合した唯一の言語である。この点でフランス語は何の役にも立たない。彼らはそれを知っている。彼らはまた、ただブルトン語のみが彼らの体と心をきちんと表現することができるということも知っ

4 Pierre-Jakez Hélias, *Ar Mên du/ La Pierre noire, Le Raffel*, Brud no 47-48, 1974, p.147.

ているのだ」⁵。

しかしブルトン語がフランス語に翻訳されないなら、なぜエリアスはそれをフランス語に訳すことに執着するのか。著者はこの問いに、翻訳はマージナルな文化と言語の地位を向上させるから、という平凡な回答しか用意していない。

もっとも翻訳による地位の向上が、しばしばオリジナルの言語を不要にするというパラドクスは、エリアスには無縁だ。彼が翻訳をするのは、フランス語がそのオリジナルをけっして完全に再現できないのを承知の上でのことだからだ。エリアスにあって、二言語のうち優位にあるのは最初からブルトン語なのであり、フランス語はつねにそのしもべなのである。

しかし、フランス語の翻訳はブルトン語のオリジナルの単なる影ではない。その翻訳における作業とは、フランス語でブルターニュの言葉や文化を模倣することであり、この仕事の獨創性は疑うべくもないのである。しかもエリアスのフランス語訳は、彼の言葉とは裏腹にブルトン語の内容をよく伝える。彼はフランス語をブルトン語化して、新しい言葉を作ろうとするのである。話し言葉としてのブルトン語の構造やイメージによってフランス語を活性化し、そこに詩的な要素を付け加えるのだ。そして、それはまさにあの『誇り高き馬』の魅力の一部を成す重要な要素なのである。エリアスはブルトン語の表現を元に、9月を「白い麦藁」と、12月を「真っ黒な月」と、飛行機を「飛ぶ車」と、洗濯機を「汚れものを洗う攪乳機」と、ラジオを「空中を越えて語るための機械装置」と呼ぶのである。

エリアスはなぜ過去を描くのか

一方、このような言語でエリアスが語ろうとするのは過去である。つまりエリアスの文学は、ある意味で時代の証人の語り口を再現しようとする試みなのである。『誇り高き馬』で読者を魅了したのも、親しさと羞恥心と哀惜がない交ぜになった過去を語るその語り口であった。しかしこの過去への執着は何を物語るのだろうか。

エリアスにおいて、すべては凋落から始まる。彼がブルターニュの凋落の始まりとして示すのは第一次大戦である。ビグーデン地方のフランス化と個人主義の浸透は、それを境に加速したとエリアスは強調する。「それが終わったとき、私たちは『新約聖書』の時代に入ったのだ」⁶。つまり1914年生まれのエリアスにとって、ビグーデン地方の文明の最盛期はすでに過去にあり、それを知るには過去を遡らなければならないのである。

しかし凋落の原因をいくら数え上げても無駄だろう。というのも、凋落とは『誇り高き馬』においてはほとんど強迫観念だからだ。エリアスはなぜ世界が変わるのかという説明はほとんどしない。世界が変わるのは彼にとって宿命なのだ。したがってエリアスの作品は、まるでイスの街のように洪水や流失で満ち満ちている。「私はこの土地を80年間離れていないが、私の国は私から離れていく」⁷。

この強迫観念の起源にあるのは、エリアス自身の故郷喪失体験であろう。そこにはもちろん学

5 Pierre-Jakez Hélias, *Le Cheval d'orgueil*, p.246.

6 Pierre-Jakez Hélias, *Les Autres et les miens*, p.32.

7 Charlez ar Gall, Jean-René Le Quéau (et alia). *Per-Jakez Hélias*, Skol Vreizh, n° 36, 1997, p.30.

校教育によるブルトン語の口承世界の喪失という経験もあったろう。しかし彼の意識のなかで大きかったのは、リセへの入学という経験である。リセで学ぶということは、別世界に入ることを、故郷という共同体の外に出て特別な人間になることを意味していたのである。

この経験を経て、エリアスが戦後に行うのは、ビグーデン人としての自分を再発見することであった。著者はそれを、グザヴィエ・グラールの言葉を借りて「回復」の名で呼ぶ。エリアスは故郷喪失とブルジョワ化の経験を経て、自分をビグーデン地方という共同体の一部に属するものとして再認識しようとするのである。

エリアスにとって、この「回復」の経験はなによりも書くことによって行われる。書くことは、過去を蘇らせるひとつの方法なのだ。現在を受け入れないエリアスは、代わりにビグーデン地方の過去という神話的な空間を、言葉によって構築しようとするのである。まるで修道院に逃げ込むような、このエリアスの盲目的な行為を非難するのは、グラールひとりではあるまい。しかし虚構が現実と触れ合う一点を求めるこのエリアスの行為は、一個の独自の文学的行為なのだ、と著者は言う。

魔術という言葉が現実と想像界を隔てる境界を侵犯することを意味するならば、この作業はまさに魔術的である。エリアスが書くことを通じて打ち建てようとするものを、著者は彼の詩のタイトルを取って「秘密の屋敷」と呼ぶ。現実と虚構が出会うその空間は、古臭い博物館ではなく、終わりのない幸福でなければならないのだ。ちょうどコルヌアイユ祭で、エリアスが皆に昔の衣装を着せて行進させると、彼らがそれまでずっとこの輝かしい行進を続けてきたように見えるのと同じように。

こうして『誇り高き馬』は、いまや存在しない世界に生まれた一人の子供の夢によって織り上げられた、この上なく貴重な証言になる。ビグーデン地方の文明はそこで夢と安寧の子供時代として読まれるのだ。祖父のお話のなかでちこまっているかのようなこの子供の半睡状態のなかで、ビグーデンの少年はおのれの苦痛とフランスの現代を忘れるのだ。

エリアスの想像界は奇妙だ。そこには未来への投機もなければ、幻想への逃走もない。あるのは、かつてあったものへの希望、完全に過去に向けた熱意のみである。著者は、同様の実践は20世紀文学には類例がなく、70年代のブルトン人作家においても珍しいとしながら、それが二重の拠り所をもたらすことに注目する。なぜなら、過去の世界を閉じ込めるということは、その世界を守ると同時に、その世界に逃げ込むことを意味するからだ。

このことがエリアスに見られる相反する二つの志向を説明する。つまり、エリアスは一方でビグーデン地方の宣伝役を務めながら、他方では人前にそれを見せることをためらうのだ。なぜか。彼にとっていまなお生きている過去を描き出すのは、それがすでに失われてしまっていることを認めることであり、またそれを人に見せるのは自分の裸形の姿を人前に晒すようなものだからだ。そして、よく知られたエリアスの次の言葉も、このような彼の志向から理解することができるだろう。「ときおり私は自分が最後のブルトン語話者になればいいと思っていてびっくりする。同じ誇りはたぶん消えてゆく職業を営む職人が感じるはず。死は慰めになる。すべてを持ち去っていくのだから」⁸。

8 Pierre-Jakez Hélias, *Lettres de Bretagne*, Galilée, 1978, p.36.

8. Ronan Calvez, *La Radio en langue bretonne*, Roparz Hemon et Pierre-Jakez Hélias : deux rêves de la Bretagne, RUR /CRBC, 2000

著者のロナン・カルヴェスはプレストのブルターニュ・オクシダントル大学教授である。本書は1999年に提出された彼の博士論文の縮約版で、1940年から1958年までのブルターニュにおけるブルトン語のラジオ放送をテーマとした力作である。

本書の主演はエリアスとロパルズ・エモンの二人で、後半は前者、前半は後者に割かれている。エモンはドイツ占領下で初のブルトン語ラジオ放送を担当したが、戦後は対独協力の容疑で市民権を喪失して、1947年にアイルランドへ移住し、1978年にダブリンで死去した。ブルターニュの運動家からは半ば神格化されているが、一般の知名度はほとんどない。

一方、エリアスは解放後にブルトン語ラジオ放送を担当して、ブルトン語圏で大きな人気を博し、『誇り高き馬』以後はブルターニュを象徴する存在にまでなったが、運動家の評判は芳しくない。

本書はこの対照的な二人がブルトン語のラジオ放送に関わることになった事情、またその放送内容を丹念に辿り、ブルターニュの戦中戦後史の隠された一面に光を当てている。以下、エモンとエリアスに関する著者の見解を駆け足でまとめよう。

ロパルズ・エモン

著者によれば、両大戦間のブルターニュ運動においては、歴史と言語が二つの核である。ブルターニュのナショナリストたちは、19世紀のブルターニュの歴史家から「ブルターニュは一個の民族、真のナションである」とする考えを受け継ぎ、また民族を形成するのは言語であるという信念からブルトン語を重視した。しかしながら、当時ブルターニュで話されていたブルトン語はけっして一様ではなかった。なによりも、「家庭のブルトン語」と「教会のブルトン語」という二つのレベルの違うブルトン語があった。前者は地域により多様で、ときに同じ言語とは思えないほどの相違があった。後者はブルターニュの司祭が話す言葉で、いわばブルトン語の標準語であった。元になったのはレオン方言であったが、語彙や発音の面で独特の工夫が施されていた。

この標準ブルトン語は、第一次大戦後、徐々にその役割をフランス語に取って代わられる。それにより、ブルターニュのブルトン語圏ではフランス語とブルトン語の言語的二重生活が一般的になった。優位にあったのは、もちろんフランス語で、都市、現代的、未来、公的というポジティブは価値と結びつき、一方ブルトン語は田舎、時代遅れ、過去、私的というネガティブなイメージを背負わされた。その並存はさまざまな問題を引き起こしたが、すぐに言語闘争と結びつくことはなかった。

この状況に初めて異議を申し立てたのが、両大戦間のナショナリストたちだった。彼らはブルターニュの政治的・言語的独立を唱えて、1919年に雑誌『ブレイズ・アタオ』(*Breiz Atao*)を創刊して政治的主張を展開する一方、1925年には文芸誌『グワラルン』(*Gwalarn*)を立ち上げて、ブルトン語文学の可能性を模索した。

この『グワラルン』の中心人物となったのがロパルズ・エモンであった。1900年にプレストに生まれ、地元のリセで学んだ後、エコール・ポリテクニクを受験すべくパリに出た彼は、その後英

語に関心を移し、英国留学などを経て1924年に英語の教授資格を取得した。翌年『グワラルン』の創刊に参加したときの彼は、まだ25歳の青年であった。

この雑誌の目的は、ブルトン語による新しい文学の創造すること、すなわちそれまでフランス語の占有物であった文学の言語という資格をブルトン語にも与え、それを田舎の言語から教養人の言語にまで高めることにあった。したがってそこで読者として想定されていたのは、一般的なブルトン語の話し手である農民や職人ではなく、エリートであった。彼らはこう宣言する。「『グワラルン』はなによりもまず新しく他に類を見ないものである。それはブルトン語圏のエリートを対象とした雑誌である」⁹。

しかしこの雑誌の読者の姿は最初から明らかであったわけではない。つまり『グワラルン』は新しい文学を創出する試みであると同時に、新しい読者を発見する試みでもあったのである。その意味で、この雑誌の創刊は一種の実験であった。「我々の文学の運命は我々の言語の運命、ひいてはナショナリテの運命に結びついており、それはエリートたちの手に握られている」¹⁰。

ブルターニュのナショナリストにとって、文学と言語はブルターニュのナショナリテを正当化する重要な要素であった。「言語的再生のないところには、ナショナルな再生もない¹¹」とする彼らにとって、ブルターニュは言語によって救われるものであり、その救済は『グワラルン』における新しいブルトン語文学の創造によって実現されねばならなかったのである。それはブルターニュにおける言語的二重性を解消し、ブルトン語による一元化を推進するための不可欠なプロセスであった。とはいえ、現実のブルトン語はそもそも多様で、フランス語のような普遍性を持たなかった。

この理想と現実との乖離を埋めるために、エモンはひとつの野心的な計画を抱く。それは自らの考案になる新しい文学的なブルトン語を、書き言葉の規範としてブルターニュ全体に普及させることであった。彼は言う。「私は一個の言語的規範を作ったし、作り続けている。私はそれに普遍性の印を刻んだ。なぜなら、それは地域的な俚語の耐え難い埃に取って代わらなければならないからだ。同時に私の言語的規範はブルターニュの土地全体に根付く。なぜなら、それは真に民衆に広まり、各人の固有財産になるように定められているからだ。ひとりの人間でしかない私、その私の精神が生み出したこの言語的規範が、民衆の言語にならなければならないのである」¹²。

ブルトン語を核としてすべてがひとつになるこのエモンの理想を、全体主義的イデオロギーと呼ぶことができるだろう。そしてこのイデオロギーは、一度エモンの口から発せられるや、『グワラルン』の活動家たちにとって従うべき規範となった。彼らは言語の研究に手を染め、新しい語や表現を作り、それをまず教養あるエリートたちに、さらに民衆や子供たちに広めようとした。そしてその結果として実現される人民、言語、領土のすべてがひとつになった理想のブルターニュを、ナショナリストたちは「パンジェ」(Pangée)の名で呼んだ。

1940年にドイツがフランスに勝利すると、ナショナリストたちは躊躇なくナチスと手を組んだ。それは彼らが従ってきたエモンの全体主義的イデオロギーから見て、いわば必然的な帰結であった。

9 Ronan Calvez, *La Radio en langue bretonne*, p.34

10 *Ibid.*, p.35.

11 *Ibid.*, p.34

12 *Ibid.*, p.48.

そしてブルターニュのナショナリストたちの活動は、このナチス占領下においてより活発になった。1941年にはバイリンガルの週刊誌『アルヴォール』(Arvor)が創刊され(42年8月からはブルトン語のみのモノリンガル)、同年10月には、ブルターニュ文化の多様性を人々に知らせることを目的として「ケルト学院」(Institut Celtique)が設置された。院長にはエモンが就任し、約200人の会員が集まった。

ブルトン語のラジオ放送がレンヌ＝ブルターニュ局で始まったのも、この占領下であった。この計画の推進役となったのは、1936年に創設された「ドイツ・ケルト学会」の有力メンバーで、ケルト学者のマールブルク大学教授、レオ・ワイスゲルバー(Leo Weisgerber)であった。彼は軍司令部からラジオ放送の仕事を任されたが、その際にブルターニュに特別な放送をとという指示を受けていた。ブルトン語ラジオ放送は1940年11月1日に始まったが、エモンに番組への協力の要請があったのは、放送が始まって数ヶ月を経た翌年3月のことであった。その主な仕事は番組編成であった。占領軍がなぜラジオ放送を必要としたのかは詳らかではない。しかしその意図がいかなるものであれ、エモンたちがこのラジオ放送に期待したことは明白であった。それは、ブルトン人を教育すること、彼らにブルターニュを再発見させることである。ラジオはそのための特権的な手段だったのである。

記録によれば、最初の放送は金曜日の昼の11時から11時半まで行われた。しかしこの時間帯に行われたのは最初の3週のみで、その後は18時から18時半に変更された。1941年初めには放送時間が55分になり、時間帯も17時50分から18時45分変わった。放送日も最初は週一日だったのが、1942年1月には週二日、2月には週三日、3月には再度週二日に戻っている。細かい変更はその後も続くが、放送時間の方は時とともに増加し、最初は30分であったのが、最後の年には165分にまでなっていた。

このラジオ放送で悔やまれるのは、録音資料が全く残っていないことである。一度は蠟管に録音されたものの、解放後に破壊されてしまったらしい。しかしこの放送のために書かれたテキストの一部は、『グワラルン』や『アルヴォール』に発表されており、番組の内容はそれを通して多少なりとも推測することができる。

著者によれば、番組を構成していたのは、雑談、思い出話、民話や笑劇などの劇作品、音楽、ブルトン語のレッスン、歌、インタビューなどであった。使用言語はブルトン語とフランス語の二言語で、話題によってはブルトン語のみの場合もあった。雑談のテーマで最も多かったのは「農業」で、次が「言語・文化・文学」、続いて「ケルト趣味」、「経済」の順であった。

著者は、放送のために書かれたテキストを検討しながら、このラジオ放送で話された事柄の大半はパンジェに関わるものであったと結論する。つまりレンヌ＝ブルターニュ局のブルトン語放送は、現実のブルターニュに向けられたものではなかった。それは、エモンが作り上げたブルターニュのイデオロギー的表象にほかならぬパンジェを対象としたものだったのである。著者はそれゆえこの放送を「パンジェの声」と呼ぶ。その声は現実のブルターニュの向こう側に、パンジェという虚構を作り上げ、その住人に語りかけていたのである。

具体例を見よう。そこで話される話題に共通するのは「時間の放棄」という特徴であると著者は言う。たとえばパンジェの信奉者にとっては、「ケルト民族」は自明のものとして存在している。

それゆえ、このラジオでケルト諸地域が話題になるときも、それが国境によって隔てられているという現実には考慮されない。たとえば、そこではもっぱら言語的・文化的状況のみが語られ、現実の貿易関係のような問題が語られることはない。

歴史に関しても同様である。放送ではブルターニュの歴史についてもシリーズで語られたが、その語りを通して浮かび上がる歴史は、まるで英雄や歴史上の人物の肖像画で飾られたギャラリーのように硬直したものなのだ。それは生きた歴史ではなく、パノラマのように動きのない一個の空間である。ブルターニュ民族は、いかに阻害されようとも、つねに変わらず誇り高く栄光に包まれた民族としてそこにあり、未来においてもそうなのだ。そこには過去と未来が一体になった、永遠の現在しかない。

それは彼らがパルドン祭のなかでも、ル・フォルゴエットのパルドン祭を賞賛する理由を見ても分かる。この祭りが素晴らしいのは、それが古代ケルト人の集会の延長であり、旅芸人や観光客に汚されずにブルトンの特性を保っているという、その無時間性のゆえなのである。

さらに興味深いのがレンヌの扱いである。知られるように、この街は歴史的に一度もブルトン語圏であったことはない。しかしこの放送では、レンヌがかつてブルトン語圏であったかのように語られ、現在もそうであり、また未来においてもそうであると想定されていた。つまりレンヌはブルターニュ全体がブルトン語圏となったときの、ブルターニュの首都、すなわちパンジェの首都なのである。しかもそこで話されるブルトン語は、これから作られるべき人民のための新しい純粋な言語であり、バス＝ブルターニュで話されている現実のブルトン語ではなかった。彼らが「どこでもブルトン語を！ブルトン語だけを！ブルトン語なしに、ブルターニュはない」¹³と言うときのブルトン語とは、ブルトン語圏ではないレンヌで話されている新しいブルトン語、すなわち「ロアゾネック」(roazhoneg)を指していたのである。

それを象徴する事実がある。このエモンのラジオ放送はレンヌ＝ブルターニュ局で行われたが、その電波が届く範囲にはおのずから限界があった。放送が始まってから行われたアンケート調査によれば、ブルトン語のラジオ放送はオート＝ブルターニュでは64パーセントの人々が聴取可能と答えていたが、バス＝ブルターニュでは89%が聴取困難と答えていた。さらにブルターニュ全体で見ると、70%近い人々が聴取困難という返答であった。つまりこの放送は、ブルターニュではそもそもほとんど聴かれていなかったのである。とくにブルトン語圏の人々は、聴きたくても聴けないという状態であった。

この事実はそれだけでこの放送のユートピア性を際立たせる。つまりレンヌ＝ブルターニュ局の放送は、その内容はもちろん物理的にも、日常的にブルトン語で生活する人々に向けられたものではなく、もっぱらパンジェの住人に向けられたものだったのである。

ピエール＝ジャケス・エリアス

エモンが中心となったレンヌ＝ブルターニュ局からのラジオ放送は、ナチス占領の終焉とともに幕を閉じる。その最後の放送は1944年8月1日であった。解放後、ブルターニュの運動家は対独協

¹³ « Kerfridi ar vrezhonegerien », *Arvor*, no 74, 7 juin 1942. R. Calvez, *op.cit.*, p.260に引用。

力の疑いで逮捕者が相次ぐ。その数はフィニステール県だけで142人に上り。死者も50人を越えた。運動家が等しく「親ドイツ」と見做される状況下で、ブルトン語やブルターニュ文化を表立って擁護する活動は停滞を余儀なくされる。一方、ナショナリストたちはその停滞の原因を、政府がその種の活動を禁止しているからだとして批判した。

解放後、国の再建が急務となるなかで、ラジオ放送はその重要性を増した。しかしブルトン語のラジオ放送に関しては、中断されたままであった。それを再開することは、ブルトン語圏の人々のためにも、またナショナリストの批判を封じるためにも必要だと主張したのが、情報省のフィニステール県代表、モーリス・ルナンであった。彼はバス＝ブルターニュの民衆のために、地域色の濃いブルトン語番組を制作すべく奔走した。その提案は政府の支持も得たが、最後まで問題になったのが、誰が番組を担当するかであった。ルナンはこう回想する。「誰もアドバイスをしてくれなかったし、名前ももらえなかった。そんなとき頭に閃いた名前があった。私はそれまでその名を思い浮かべたことはなかった。ピエール・エリアスである」¹⁴。エリアスは学生時代からその知性と多才さで際立っていた。しかも彼はルナンの近所に住んでいた。つまりエリアスはルナンの個人的な知己のなかから、直観的に選ばれたのである。このルナンの提案をエリアスは喜んで受ける¹⁵。またエリアスの相棒役には、プロゼヴェット生まれのレンヌのリセの英語教師ピエール・トレボスが決まった。

二人による最初のラジオ放送が行われたのは、1946年12月21日。エモンの最後の放送からすでに2年以上が経っていた。しかしながらエリアスの放送が行われたのは、エモンが拠点としたレンヌ＝ブルターニュ局からではなく、その年にバス＝ブルターニュのラジオの受信状況を改善すべく開局されたラジオ＝キメルフ局であった。そしてこの放送局の電波は、バス＝ブルターニュより外には届かなかったのである。それは、エモンの放送がオート＝ブルターニュでのみ受信可能であったのと、ちょうど正反対であった。

この事実はこの放送の性格をよく表していた。エリアスはそこで最初から対象とする聴取者の姿を明確に描いていたが、それはエモンが対象としたようなエリートではなく、大衆であった。彼はまた、放送で使用するブルトン語は現代生活に適用できるように改良された新しいブルトン語ではなく、農民や漁民が仕事で日常的に使う生きたブルトン語でなければならないと考えた。彼が自らの放送の使命としたのは、ブルトン語を生活言語として使う大衆が自らの言葉への誇りを取り戻すことだったのである。そこではブルトン語にフランス語が混ざろうが、何の問題にもならなかった。

また彼らは発音を中立化しようとはせず、ビグーデン人であることがすぐに分かるような話し方をした。いかに地域差があるにせよ、コルヌアイユ方言とレオン方言とトレゴール方言の間には共通点も多く、理解に支障はなかろうというのが彼らの考えだった。重要なのはむしろ、それがブルトン人の耳にとって自然なイントネーションであるか否かであった。彼らはこういう決まり文句で放送を始めた。「こちらラジオ＝キメルフ局、お母さんの膝の上で言葉を学んだブルトン人のため

¹⁴ Lettre du 17 avril 1996. R. Calvez, *op.cit.*, p.111に引用。

¹⁵ エリアス自身は50年後に『記憶を乞う人』のなかで、自分にラジオ放送の話を持ちかけたのは、レンヌ市長を務めたアンリ・フレヴィルであったと書いている。Cf. R. Calvez. *Ibid.*

のラジオです」¹⁶。

エリアスはまた積極的にラジオ局の外に出て、村祭りや祝宴の舞台にマイクを持って参加した。また祭りの方でも、彼の参加は人を呼べる出し物のひとつとして歓迎された。しかもエリアスにとって、そのような場に出て行くことは、口頭伝承を教えてくれる人に会おうチャンスでもあった。

番組の放送時間帯は、最初の数ヶ月は毎週土曜の20時から20時30分であった¹⁷。なかでも成功を収めたのが、エリアスが演じるジャケス・クロヘン (Jakez Kroc'hen) とピエール・トレポスが演じるグイルー・ヴィーアン (Gwilhou Vihan) のコンビによる笑劇 (farce) で、その人気は自宅にラジオがない人はわざわざ隣家に放送を聴きに行ったと伝えられるほどであった。そしてこの放送で「ジャケス」が別名になったピエール・エリアスは、のちに自らをピエール＝ジャケス・エリアスと名乗るようになったのである。

もちろん批判もあった。なかでも多かったのは、戦時中のレンヌ＝ブルターニュ局の放送と比較しての意見であった。「百姓趣味はやめて、ブルトン人に言語を教えるような、文明の言語としてのブルトン語で放送して欲しい」という声や、番組の卑俗さを指摘して、「ラジオにおけるベカシーヌ」と断じたり、「われわれの美しいブルターニュを嘲弄している」という非難もあった。あるいは「なぜエリアスだけなのか、なぜビゲーデン方言だけなのか」という声もあった。

では「百姓趣味」と呼ばれたその笑劇はどんなものだったのか。登場人物のジャケスとグイルーのコンビが住んでいるのは、エリアスの故郷プルドゥルジックである。二人は農作業に従事し、民族衣装を着て、妻はコワッフを被っている。時代は第二次大戦後、つまりちょうどラジオ放送と同時代という設定である。グイルーはフランス語をあまり解さず、読み書きもできない。残された録音を聴く限り、二人の話すビゲーデン訛りのうち、ジャケスのそれは明瞭で、グイルーのは強く、かなり昔風である。年齢は二人とも60歳過ぎ、つまり1880年代の生まれと推測されるが、彼らが起こす出来事はいかにも自然で、実際にプルドゥルジックで起こりそうなものであった。

ところで、最初はプルドゥルジックとされていたこの二人の村は、ほどなくエリアス自身によってプルフォウイック (Poullfaouig) という名前に変えられる。場所はボン＝ラベのごく近くで、明らかにビゲーデン地方の村なのだが、あるときからそこはプルフォウイックという架空の村になってしまうのだ。

笑劇のなかで笑いを催させるのは今昔の対比だった。そこでは、たとえばコワッフを被るために、毎朝すえたバターで髪を固めていた女性の話や、ジャケスのいとこが帽子のなかに隠していた家の鍵を、ズボンを閉めるために使っていた父親の話などが語られたが、今昔の対比をより意識的に主題化したのは、むしろ「ルリックもの」であった。

「ジャケスもの」と並んで、エリアスたちによってラジオでよく演じられたこのシリーズの登場人物は、トントン・ルリック (Tonton Loullig) とエルヴェイク (Herveig) である。ルリックは70歳で、第一次大戦に従軍した。妹と牛の世話が忙しく、小学校に通ったのはわずか3か月だけだった。左利きで、左頬はチックのため脹らんでいる。民族衣装を着て、帽子を被り、木靴を履いている。「人

¹⁶ *Ibid.*, p.188.

¹⁷ この番組の放送時間帯は、番組が終わる1958年までの12年間でわずか3回しか変更されたことはなかった。48年10月までは毎週土曜夜の8時から8時半、50年3月までは日曜の同じ時間、その後は58年までは13時25分から13時55分であった。

と物はずっとそれが置かれたような状態であらねばならぬ」と考える彼は、ことあるごとに40歳のエルヴェイックと対立し、それが伝統と現代の葛藤を浮かび上がらせる。そこでは昔が肯定され、「いまではもうバターの色はない。まるで雌牛が皆若い雄牛に変わってしまったかのようだ」などと言われたり、箆筒寝台を納屋に片付けるつもりだったルリックが、新しいベッドではよく寝付けなかったので、再び箆筒寝台で眠るというエピソードが語られたりした。

この「ルリックもの」をきっかけに視線を過去に向けるようになったエリアスは、次に「ペンダ=ベン」(penn-da-benn) というフォークロアの番組を始める。ブルトン語で「最初から終わりまで」を意味するこの番組では、毎回、粉屋や仕立屋や音楽や燈台守など、フォークロア的なテーマがひとつ選ばれ、文字通り最初から終わりまで紹介された。

ブルフォウイックのフォークロアを叙述することは、エリアスにとって、彼のブルターニュの原型、すなわち子供時代のブルターニュを蘇らせる試みでもあった。このときブルフォウイックは、バス=ブルターニュと同義語になる。しかも自ら作り上げたその村で、エリアスは祖父と同様に民話の語り部となってしまうのである。

1946年暮れから1958年まで12年続いたこのラジオ放送の中で、エリアスが取り上げたジャンルを多い順から並べてみると、一番が民話、二番が「ジャクスもの」、三番が「ルリックもの」という結果になる。さらにそれを時系列で見ると、最初の4年間は「ジャクスもの」が多く、途中から「ルリックもの」を含めたフォークロア研究が増え、1952年頃からはその両者が減少し、民話の数が増えていく。

つまり民話は、エリアスがラジオ放送で最後に行き着いたジャンルであった。民話とともに、彼は過去を蘇らせることから、普遍的なテーマと人物で新たな世界を創造することへと向かう。民話はその普遍性によって、空間的にはブルターニュに属しながら、時間の束縛を免れる永遠性を持つ。「ジャクスもの」では聴取者とともに現在にいたエリアスは、「ルリックもの」やフォークロア研究で過去を振り返り、最後は民話によって永遠性へと、いわば「ブルターニュの魂」へと向かうのだ。

ブルフォウイックという理想のブルターニュを創出したエリアスは、村のあばら家の暖炉の片隅で、仕事を終えた村人たちに向けて、まるで昔の語り部のように語りかける。現実のブルターニュでは、人々がテレビでエリザベス2世の戴冠式を見て、娘たちが「パリ=マッチ」を読んでいるそのときに、である。

まとめ

エモンとエリアスにおいては、一見すべてが正反対であるように思える。肖像画においても、エモンがネクタイを締めて、パイプを口にするか手に持って厳しい顔をしているのに対して、エリアスは多く微笑んだ、陽気な人として描かれる。エモンはブルトン語にエリートのための新しい言語という地位を与え、ブルターニュの運動家を新しいブルターニュの建設に参加させたが、エリアスは大衆のなかに入り、彼らの言葉や習慣を丸ごと認め、笑いによってその心を和ませながら、彼らに誇りを与えようとした。エモンはその全体主義的テーゼによって対独協力を走るようになったが、エリアスは積極的にレジスタンスに参加した。

しかし、これら多くの対立点にもかかわらず、この二人は双生児のように相似るときがある、と著者は言う。そのひとつが現在に対する不満である。その不満は、エモンをパンジェという未来に、エリアスをプルフォウイックという過去へと向かわせた。二人はその時間的な方向においてこそ正反対であったが、現実のブルターニュに背を向けたという点では共通していたのである。しかもパンジェとプルフォウイックは、後者が過去の再現であることを止めて、無時間性を帯びてくるとますます接近した。それは二人にとって、永遠なる現在として、過酷な現実を逃れるための避難所として機能したのである。

似ていると言えば、ブルトン語への影響もそうだった。エモンはそのナチスとの関係において、結果としてブルトン語を貶めることになったが、エリアスもまたブルトン語をプルフォウイックという過去へ、無時間的な空間へと閉じ込めることで、自らの意思とは裏腹に、ブルトン語が決定的に過去のものだということを聴取者に告げてしまう。つまり二人の行為は、結果として、人々がブルトン語を放棄することを正当化してしまうのだ。

彼らがラジオに関わった1940年から1958年までは、フランスにおけるラジオ放送の黄金時代であった。そしてこの時代に、おそらく思いがけずこの最先端のメディアに関わるようになった彼らの仕事は、いい意味でも悪い意味でも、その後のブルトン語のステイタスに影響を及ぼさずにはおかなかった。パンジェとプルフォウイックの背後にあるのは、結局のところブルターニュとは何かという問いにほかならないのである。

(つづく)

付記 本稿は平成24年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））による研究「ピエール＝ジャクス・エリアスと20世紀ブルターニュの諸相」（課題番号22520321）の成果の一部である。